



099
37
172

1
2
1



蓮 991
37
172

49-1219

柳葉日記

後普光園院撰次



如く京春の里に原の川に
とくし今年に花侍
當神の三笠之山に
たて山の友浪を海
に代りてしるはるの
都はるにけしりしるはる





也
田代

里中柳都のつる枝はまはれ株子

ほれ拾はれ山出秋の目こ

粟のいぶるし林をさすむ

床は杉葉ひをく水は草

見ゆき恨むはむさゆ

うはむはまはる世のあは

むあうい人の美具はゆ

うううううううううううう

あまのこふ結き候床は

けのふ結にらるるあは又日と暮

もはきりかまぬはむはむ

まはら現れはよとて誠は不思

けりよとてふた神は神は

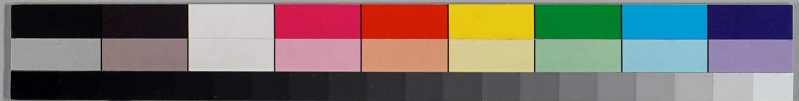
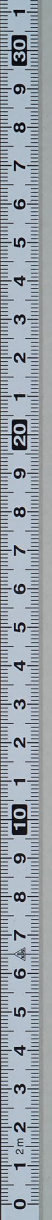
人よはあまのまはれはむ世春の神

神のらるるはむはむはむ



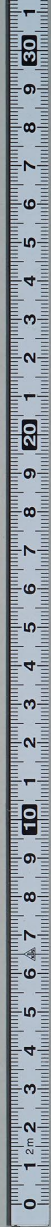
此の巻に在りての巻は、
并處に、いかに、所方に、類あり
ふりきよまを、いかに、いかに、
に、五、梵、寺に、注、里、河、梯、と、い
は、正、あり、と、傳、は、り、は、一、の、梵、堂
い、た、不、思、法、の、西、弁、に、い、る、也
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
は、り、を、い、か、し、い、か、し、と、い、る、也

丁、丑、の、世、に、い、か、し、い、か、し、と、い、る、也
禅、門、に、い、か、し、い、か、し、と、い、る、也
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、
い、た、と、い、は、れ、て、其、後、に、傳、り、



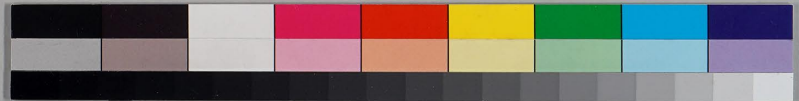
神祇の御心成りてを以て
以て汝も成るべきなり
本社に御心成りてを以て
以て汝も成るべきなり
の故に是事すまはれ
わる。此れは御心成りて
言所にはきこはれ被辨事也

神の御心成りてを以て
以て汝も成るべきなり
の故に是事すまはれ
わる。此れは御心成りて
言所にはきこはれ被辨事也



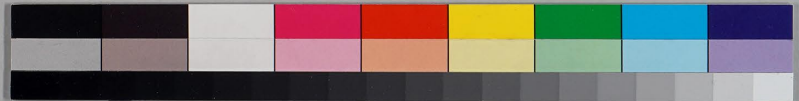
大印付伝書世利南園堂
本尊のいつまゝ、の果中業何
年好の一事好年いふ
し物入るるまは合は
るる口くまはしるる中
瑞好けりおれし一夜の年好
おつまもあまういふ、融様
おつまもあまういふ、融様

かみ強の眉公何はは月十言
れ也登も世も日かた、まは
く付たふいふ、云深少り
す、ふ、空、牙、ま、れ、猫、の、中、に
く、く、中、深、は、く、ま、は、わ
付た、ま、人、二、三、の、れ、お、い、底、縁、形、人
一、二、百、个、今、年、月、上、は、何、う、今
う、り、ち、ち、は、も、其、日、は、女、ち、れ、



邦中にもあるは、
命のおりる主人のあはれ
あつたか、
六事所行て、
白濁、
誠の神、
勝、

今、
人、
子、
一、
長、
一、
春、



司^との^りは^らる^るに^して^は時^の推^の別^の為^也

常^に推^{して}極^{まで}と^して^は極^{まで}三^の甲^の入^り

あ^つて^は来^た世^のの^した^り方^はさ^らに^して^は

寂^に後^に東^の方^に上^り湯^をさ^らに^して^は已^れ時^也

く^も来^た世^のの^した^り方^はさ^らに^して^は已^れ時^也

永^く前^に一^の本^を合^{して}は^らる^る身^具上^りて

先^に堂^上人^のの^した^り方^はさ^らに^して^は已^れ時^也

海^下知^のま^じり^ては^らる^る身^具上^りて^は已^れ時^也

上^りて^は已^れ時^也の^した^り方^はさ^らに^して^は已^れ時^也

年^の時^のま^じり^ては^らる^る身^具上^りて^は已^れ時^也

一^の本^を合^{して}は^らる^る身^具上^りて^は已^れ時^也

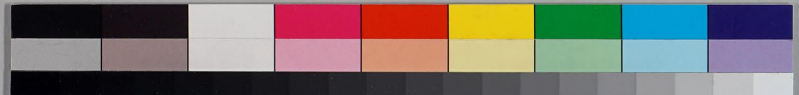
来^た世^のの^した^り方^はさ^らに^して^は已^れ時^也

あ^つて^は来^た世^のの^した^り方^はさ^らに^して^は已^れ時^也

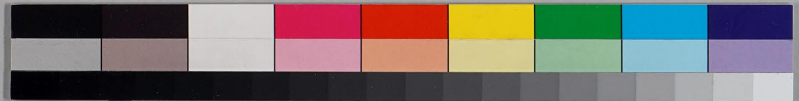
と^して^は来^た世^のの^した^り方^はさ^らに^して^は已^れ時^也

其^の礼^をし^ては^らる^る身^具上^りて^は已^れ時^也

上^りて^は已^れ時^也の^した^り方^はさ^らに^して^は已^れ時^也

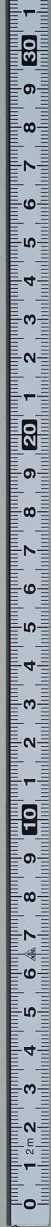


花柄の二巻二帖書了。これ昔れ
著りしものなり。此後舊紙
は由緒も無事と。又か友友
職に申渡す。と云う。一
と云ふ。一と云ふ。其後其流の
傳りしものを上巻の。一
よ。中。期。に。流。れ。底。被。倉。紙。の
よ。の。末。紙。所。巻。く。肩。と。向。上
國白字氏の人。種。紙。云。々
吾神の威。た。た。り。初。紙。成。運
ん。せ。久。く。く。紙。の。一。回。に
其。後。亦。此。の。方。と。す。と。紙。を
け。種。紙。教。白。紙。先。布。と。し
紙。は。ま。り。布。の。紙。種。紙。末。紙
一。と。下。給。中。國。白。字。の。人。の。座。の
前。に。ま。り。紙。の。一。回。と。布。と。す。



ゆと始て後本社の御林を以て
止射也と御林宮とも霞面にて
播磨は時ふ人遊政未と是は
敬き遊の、えりりり。園白以下
係祖まき首と此の心をま快に
中門の道にいと時ふ本の中
に其の心きて流すに神行にふふ
所らに行列をいひてわたり

わとと世をえ及い候中と
波の中わく先赤は二行に数入
白杖とも赤杖と決白杖は形入
数白人排杖とも決赤杖は
太の神の神堂に神入数白人杖
も決り又黄杖は神入数白人杖
決御止射神可とも東草と若
霞面とて候りとも神入数





白久随有、未分は、未と、
 休幸、公、国、良、柳、中、後、以、練、鼓
 と著、給、随、身、十、中、以、七、六
 神、行、以、此、行、ま、と、給、又、行、う
 故、文、文、不、今、再、諾、と、し、門、亦、取
 次、再、及、は、ら、う、次、古、言、信、改、新、并、也
直後
 故、上、一、人、亦、也、次、今、公、河、内、云
景直
 次、基、山、院、大、地、主、新、終、あ、ら、う、と、う、ゆ、ゆ

次、九、東、大、地、主、一、東、大、地、主、改、河、改、中
 他、云、次、必、宗、中、地、云、次、別、苗、例、如、し
 け、し、世、の、言、入、る、事、也、と、い、は、る、事、也
 高、次、五、國、寺、中、地、云、次、必、宗、中、地、云
 院、寄、出、れ、地、後、云、次、と、い、は、る、事、也
 也、札、也、公、國、良、中、後、と、い、は、る、事、也
 願、は、る、事、也、再、給、は、ら、う、と、い、は、る、事、也
 國、良、の、再、給、願、身、別、公、基、垣、願



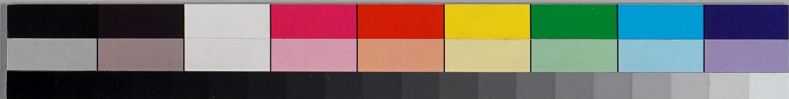
一系の濁及西供宜才貨康仲先宗殿
為有兼時九系の濁及西供はり
次僧侶次推別當已下僧侶之系院
僧初西身と世の長給神初紙
○くわし侍 次底被二更
輝と映連て元湯るり行らる
いふたむきとるりとるに
さきさきとるりとるり

いひきりゆとるり此の底被り
去はり振舞はるる東に
言例と成のり了はれしとるり
らるる東にむし波酒はりてとるり
映連に掃りてはるる東に
言例と成のり了はれしとるり
はらら破らるる東に
人より傷らるる東に



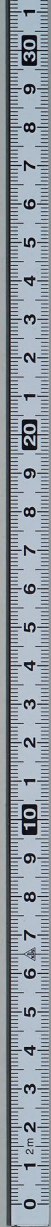
好世奉公知の人教は亦
まじりけり侍りて色
もよわ世らに公の人の
まはれふ例の色言者
申す中時斗まわも情神
はうろ名も香末山の代
涼もあつはれ始りて
とまむるは神人

峰もえりて神無の山
中ねと不全の時の神
まろにこれわわも音
まの神もりてこの神
れはらてまも神も
まの神にふも神も
はる神のまも神も
れらまての神も



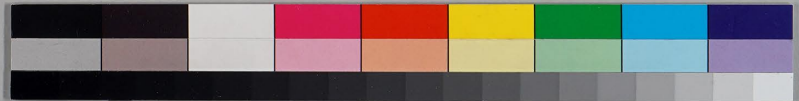
新にうらなふまゝと印きて
小字大かきしき 時國自書
如の毎に上格と行けりし步
と捨りしと来りしと行り
るたしと女文の院の御
まはつていゝまゝと
に初筆六条つゝに接敷とぬ
て見ゆにほりし人よと

ふり印ておつゝと世にまゝ
ぬりていゝ日かたに
けりし年にもいゝりし
とまゝと武運極たの
はれし例のまゝに
しゆ 世新と違ひし
り初知林に六条に
いゝと後戸に



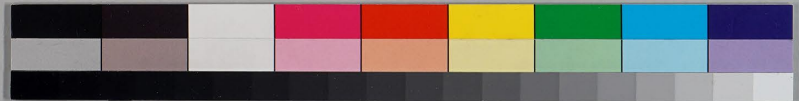
鳥の栖居に九十九の間に
好むはふかしの神人又寺官
年にはたけむるの法座に
これに中にもうけの西塔と
何れと承の當社の神といふ
はともて来るとしてせられた
身も申すに去るたては
りりつて又の所へ書付侍也

寺官の僧の中世春日の神に
神更と只神の何れか
知りてふ返つて念に侍れ
此日本由とて當社の神成致の
るしにて侍る其の八神勝太神と
正八邊春日大明神に社人帝王
とて人官とも器量成るるは
御来にりて八邊の神に



神天皇降りてとて人々を
之後、神の跡踏草魚十
津田と云ふ、とて伊勢春日
津波の江のり、伊勢首天
高皇產靈尊と中林のり、伊
勢の世林、玉之、とて伊
只天た、萬事成、とて伊
也、其神天照大神、伊勢皇孫

伊中、伊の中流、とて伊
由、天た、とて、伊、天照大神
も、其時、天た、あり、とて伊
神、之、種、人、當、とて伊
八咫、是、天、日、、八咫、瓊、曲、玉、是、天、皇、
草薙劍、是、天、皇、、劍、世、之、種、とて伊
也、伊、之、神、天、皇、皇、孫、伊、皇、孫、
天、皇、皇、孫、伊、皇、孫、



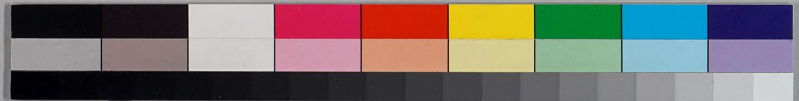
天の行 時天児屋根命
ハ神也の奉イ其歌也
其心海の 其徳比の
其心天照を神也
由イ我子孫世々皇中
神主也
福と能く命と
一也子孫也と神約の

其心天照を神也
由イ我子孫世々皇中
神主也
福と能く命と
一也子孫也と神約の
則今也春日の
と神也
伊弉諾伊弉
天孫也



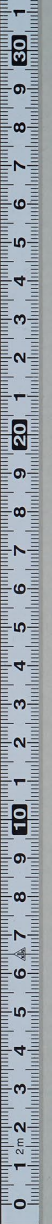
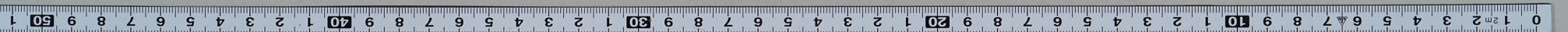
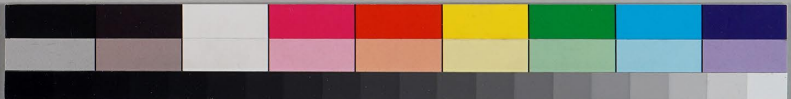
所奉の二分は又春日神
神のちへの枕持のり
はきこほり
くさ駿はるゆき
の民と土佐に解ゆ
常吉帝位に
ゆきと
と遠才のり
まて神神此

誓約云作
たか我
り
はと
はゆ
青水に生剣
に
國朝



史記卷之八十五 留侯世家
其後所願成就のはた大和宗一玉
とらわう地政とたすす之玉て
春日社 斎庭とと一 其神社
のこしとわきゆり末ととこられ
なほ平八陽と春日と止直れ
に中しむらうのゆへととた

高りしとと人よふ初末とと
字しゆら久き大才聖人ゆへ
中分除にゆへ中にゆへとと
人がこれゆへゆへ人の我名利
とまはるこゆへとと人よと
先しととゆへゆへゆへゆへ
はゆへゆへゆへゆへゆへゆへ
ゆへゆへゆへゆへゆへゆへ



此世に生じて諸國を以ては
給し用ひ給ふべきに秋に始
況は我減度の後論に據り
本邦の如く廣く府と守と
一變に化すも亦その
と申すに及ぶては其も亦
人たるに依りては其の春日
人の神に本邦地獄菩薩に依りて

と給ふ人と物け給ふ是也
海平の政體名義に信公
く日と云ふことなること
くは本邦神慮子に依りて
と申すに及ぶては其も亦
の如くして不思議に侍りて
くは其の如くして其の如く
くは其の如くして其の如く



何事にも非人の雅人とていひの
あつていへらうかといふに
いへらうかといふに
いへらうかといふに
いへらうかといふに

文化七年十月廿二日

保正二
光延

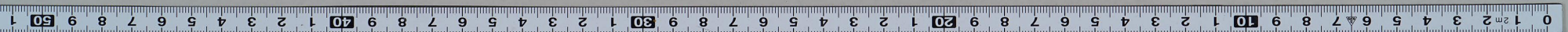
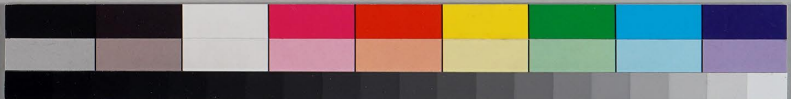
とら
とら

止二位
保正二

白鶴記

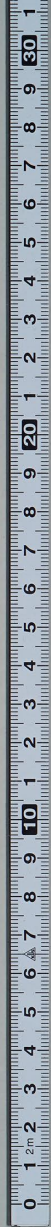
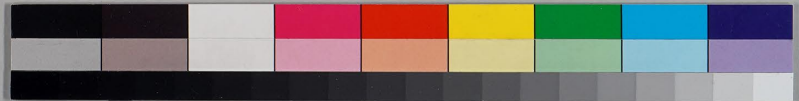
後普光園院撰
良卷

丸鷹と云ふは鶴を以てし
て鐘は山に鳴るなり
春鳩は紅や秋鶯と云ふは
食はるに似たりといふは
也珠は玉に似たりといふは
遠くともくくるといふは



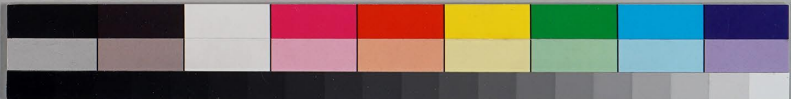
常とゆへは哀味とていへば我
親仁徳天皇と御所の御事
くく代の帝は禁物に御持
宇山并に御道徳とていへば
親中寛平宮流に御事勝負の
御持に候は北御玉林に候は
くくく末代鷹に候は龜鏡に
とて毎月石右に御事出候は

の鳥とていへばその鳥の鳥は故
殊の良鷹とていへば故は逸人と
いへばその世屋の二鷹公上音料に
とて御事御事とていへば御事
御事御事御事御事御事御事
根の返りと御事とていへば
御事御事御事御事御事御事
の御事御事御事御事御事御事



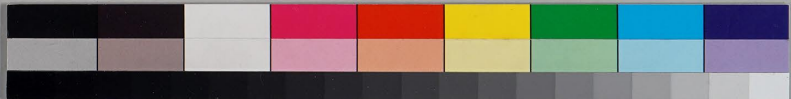
ととてふふは東の河と
とてふふは北の河と
とてふふは南の河と
とてふふは西の河と
とてふふは東の河と
とてふふは北の河と
とてふふは南の河と
とてふふは西の河と
とてふふは東の河と
とてふふは北の河と
とてふふは南の河と
とてふふは西の河と

所は白鳥とて羽を折る所の
とてふふは東の河と
とてふふは北の河と
とてふふは南の河と
とてふふは西の河と
とてふふは東の河と
とてふふは北の河と
とてふふは南の河と
とてふふは西の河と
とてふふは東の河と
とてふふは北の河と
とてふふは南の河と
とてふふは西の河と



事柄のこころをいひて
中たつ月先明星に似て
こころを射とる之を
毛白糸の如く
はくを射とる之を
毛白糸の如く
振かへて射とる之を
こころに射とる之を

毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く
毛白糸の如く



まゝの解 展のいふは
ふりふり せむいふは
けむい 羽石のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは

新世能のすむいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは
にせむい 展のいふは



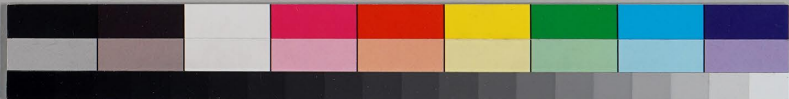
文化七書首の書

正二任藤原公雅

雲井抄注

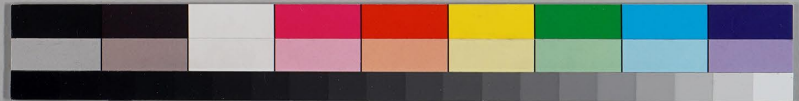
後尊光園院撰改良若

ふ山々道は身入るる尾の穴
 回く人抄とくもはゆふに雲の
 神とくはゆふもはゆふとくは
 鳩の杖にいふもくくはは神
 け昔ふらに雲かまにふらふら
 河。金ころいふもくくはは重



此中よりある場所には
まはつてをば解つてゆきて
何れの中にもいふべきは
あつたの事もなきは
女は女はまにわらへて
ふくむはらへる事あり
くも花よまはつて世にまはつ
来い世にまはつては

西より一統改まるとも
治れ改まるとも
民の奇事として
時代はまはつてゆく
何れもまはつてゆく
幸す代とまはつてゆく
わらへる春はつてゆく
申つてゆく



新書の唐と云ふ所の六代
廿五日表(東陽)の記述に
くまの物大船のついでに
白教と云ふる所は、
いふに、
くまの物大船のついでに
白教と云ふる所は、
いふに、
くまの物大船のついでに
白教と云ふる所は、
いふに、

今を以て、
馬車の上のついでに、
何事か、
一、
神宮、
今日二月、
華城、
は、



ゆらりては松法とていふ事
仁奇殿にて昔冲城法行と其
後其の帝位を世に傳ふは
き建武ゆらりて事は教厚に
之とわくともいふは四院又
獲安に室蓮院の御旨は沖
城に是るゆらりて法あり也
むのいふ事はゆらりて法例

りてなきこといふはゆらり
またゆらりて法のゆらりて
えんはゆらりて彼龍は沖山龍
は林ゆらりてはゆらりてはゆらり
ゆらりてはゆらりてはゆらり
崩玉のゆらりてはゆらりてはゆらり
ゆらりてはゆらりてはゆらりてはゆらり
とゆらりてはゆらりてはゆらりてはゆらり



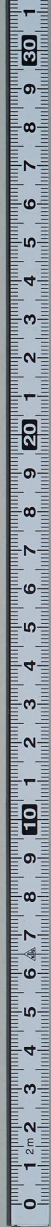
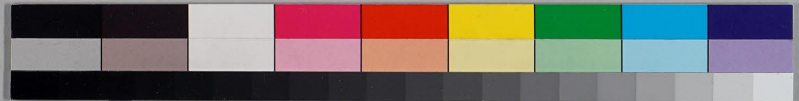
菊のついでに中々花はつら
ふと尋ひては留まらばに
一樹は法の共には世にあら
はるゝ 縁に津入申す
はらへて人かまはるゝ
あはれに申すは又申
前にもつれははれはるゝ
此御威法法縁はあはれ申す

ゆり花はつれはるゝ申す
印しはつれはるゝ申す
こゝろはつれはるゝ申す
にをれはつれはるゝ申す
と目と揃へてはるゝ申す
舟はつれはるゝ申す
あはれはつれはるゝ申す
日暮はつれはるゝ申す



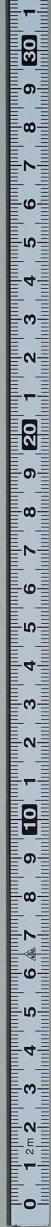
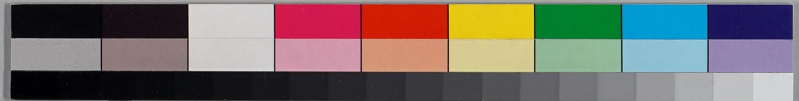
行きて二十人先陣入奉るじ
ふ申越勢も之のたにら
れ狩長ふとき括るは牛
に追らしては面白く
又陣石の陣後れ故に
の狩長もはまら
はわい
か
等持院改室蓮院改

なれ世の礼に沖を
ゆ
を
人
公
れ
よ



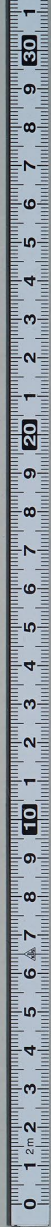
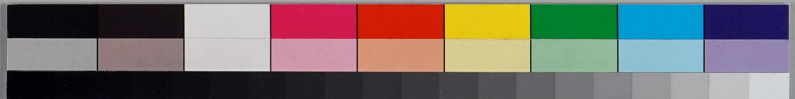
ゆいんりき入はる。あはれ
ふかゆきゆひのまはるに
たふたゆきゆひのまはる
はる、まはるまはるまはる
にまはるまはるまはるまはる
はるまはるまはるまはる
はるまはるまはるまはる
はるまはるまはるまはる

唯石運つまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる



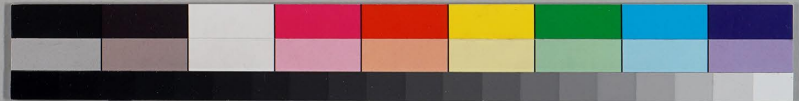
簾に小ありて是を教へては是れ
南宗に於ける是と教へ徳意の發
したる東の策士大堂の示人持世と
しき其まの世に流るる
此其の人の世に於けるに
子の心はありて其の心は
寺の道をも身にしむるは
彼は此の心をもて

まゝの身をもては
此の心はありて其の心は
中におけるは是れは
横に流るるは
神の心はありて其の心は
はつたるは是れは
はつたるは是れは
はつたるは是れは



故内膳初公兼僧初者位は行
堂上八手五脚前大酒子と長
辨 菊 今お川大酒とらとら
賢徳 氏初行とらとら 室州
初年おと長 菊 室州初年おと長
冬はの口菊 國初年おと長
賢徳 室州の？とらとら
泉三任とらとら 龍中とらとら

初年 菊 室州の故を初年 室州
り初とらとらの初年 楊梅のり
とらとら 菊 室州の初年 菊
賢徳 初年 菊 室州の初年 菊
賢徳 初年 菊 室州の初年 菊
賢徳 初年 菊 室州の初年 菊
賢徳 初年 菊 室州の初年 菊
賢徳 初年 菊 室州の初年 菊



人々其の流に流るる地を信春
下御殿の向に御殿と云ふところ
に於て整備河のより於ては
此のよりいふ所は東市に
直に於て人々もこの道に
は多くと云ふ事先此の
白河の頭吳船を云ふ事
此の舟のりも御殿に於て

此の舟のりも御殿に於て
白河の頭吳船を云ふ事
此の舟のりも御殿に於て
白河の頭吳船を云ふ事
此の舟のりも御殿に於て
白河の頭吳船を云ふ事
此の舟のりも御殿に於て
白河の頭吳船を云ふ事
此の舟のりも御殿に於て
白河の頭吳船を云ふ事



すもあゆみ 公兼信初より有兼孫
重光宗 権様の子宗の宗は
宗の如池とては 宗有申 宗
ゆめ 宗孫宗光は 宗は又如池は
宗は宗孫 宗孫信之礼聖は宗也
三宗礼は 万林宗は 宗は敬礼
ゆめは 准右古宗は 宗は礼は
宗は宗 又宗万林宗は 宗は宗は

三宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は
宗は 宗は 宗は 宗は 宗は



西教珠と云はばはげ程は之を
る所と云ふは皆中より在る
右の由及中流を別するは蓋と
撰僧にまゝなりと云ふこと
時折の事なり初ると云ふは
昔よりすなはち此の由なり
本寺の沖物交と云ふはゆゑに
可なりと云ふは此の由なり

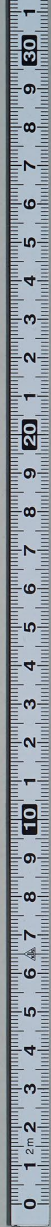
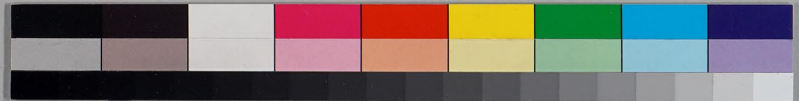
と云ふゆゑ又の事なり
由は後の事なり此の由なり
いふ事なりと云ふ事なり
此の由なりと云ふ事なり
此の由なりと云ふ事なり
此の由なりと云ふ事なり
此の由なりと云ふ事なり
此の由なりと云ふ事なり



江中へいそぐはるをむらさきの
舟しき、望みしやうをうらむ。とて
あしひくひのけしき、あはれ
は又ゆきあふむむらさきの舟に
りかぬまゝの舟にせしむとて
こゝろを海東持けり

同じあはれ、今日身二是にむらさ
き、あはれむらさき、あはれむらさ

樂あはれ、敬まはれ入る、敬親親むらさ
親むらさ美親むらさ仲親むらさ中親むらさ
親むらさ親むらさ資むらさ資無親むらさ
等むらさ今日、主津むらさむらさ
むらさ中親むらさむらさむらさ
むらさむらさ海東持けり、今日、
親むらさむらさ、あはれむらさ
あはれむらさ、あはれむらさ



汲江のていじん入神ある所の院
といふうまゝに存するにせむん
と汲江のていじん入神あり

今宵の袖長、早城法久人の巻

先のていじん入神あり

二月一日のていじん入神あり

ていじん入神あり

ていじん入神あり

敬告はけりしを親戚英親臣仲

朝臣季中親臣教を親臣振氏親臣實

小孫弟直重先がていじん

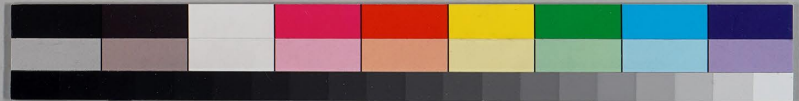
別ま二日中日にていじんあり

ていじんあり

ていじんあり

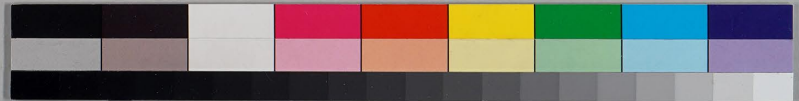
ていじんあり

ていじんあり



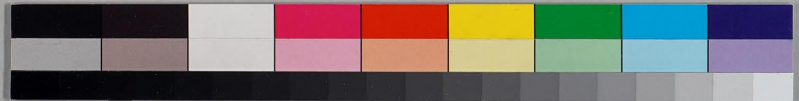
抄まゝに仲人共の御印
ありしに、是は仲人の後
將長とて、人々を治めし
云神國之人も、陳其長に
す不爲の一事は、准石を
に神祇候とて、是は仲
す由り候し、列侯に
堂上堂下人の座敷は、

少く希く、夜に、
海大が沖に、人々
船中、舟とて、
湖子とて、
由り、
形、
は、
あり、



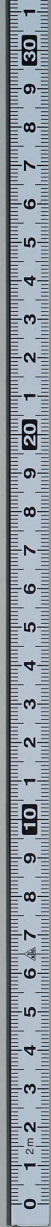
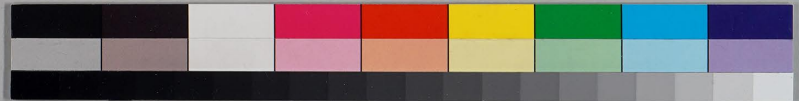
破法十加他又全来逆礼乐好三氣
初来再全来序加他又三何日
敬礼既于人御礼殊以于来再
生来以破又加他例のこゝに
の来と夫管来浦浦年重樂也
必海は来海音来決り初り准右
御兼はこゝに御人御礼に初り
こゝに初りこゝに右衛門御兼持別

清大右門公より書りし是上り
色は警固の由り森押ゆりや
敬善の玉印は房より出りしに
分りしに初り下来拾翠来久也
向は来鳥のまわり堂上言下り
来入初は初り但神今分りの
人何よりしは天候より清法苗香
筆人筆右来内書りし加堅は



今春のるえのゆりしよ
師の上大腰巻あてのゆりしよ
右のまはりに小社とて
おと角座より高橋のまを
てはゆりしよと石巻の金
ゆりしよ種々のゆりしよ
ゆりしよゆりしよ
あゆりしよゆりしよ

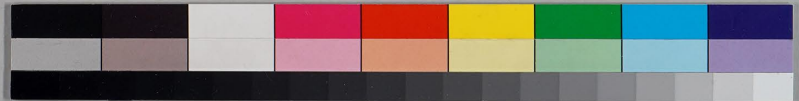
ゆりしよゆりしよゆりしよ
ゆりしよゆりしよゆりしよ
ゆりしよゆりしよゆりしよ
ゆりしよゆりしよゆりしよ
ゆりしよゆりしよゆりしよ
ゆりしよゆりしよゆりしよ
ゆりしよゆりしよゆりしよ
ゆりしよゆりしよゆりしよ

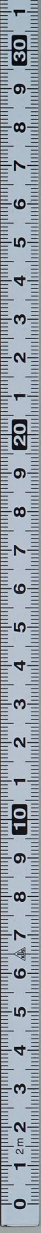




沖地に主上沖苗の御業と
と申すは、言井と申す
て商人身と申すは、商人
の身に管絃の御業と
申すは、御業と申すは、
にふれ
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、

御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、
御業と申すは、御業と申すは、





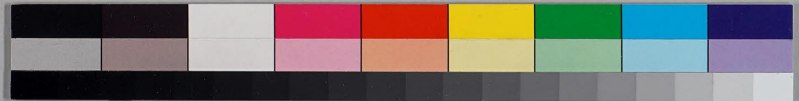
一 彼の時の物にさへ
 此の如くは是れ其の
 比にあつたはるは是れ
 此れ中城に切折に人々
 にあらす由に准后は約四万米
 猪中絶之れに中城は其の仲は
 故中絶の別當の事か其後在東門
 何れにさし別當の置すは其の事

是の事て中絶とて其の別當の事
 としておきては其の事て中絶
 此の事にて其の事にて
 此の事又盤漫に其の事にて
 中絶の中絶とて其の事にて
 此の事秀長に准后の事にて
 りて其の事にて其の事にて
 此の事にて其の事にて



藤中絶てたふまのり初に別り
夫のすゝ陰朝日長実増すま
李甲朝日長実増すま、推氏
朝日身浮法有りま、初に別り
僧行ま、と別り、故に僧行ま
ふ、道行ま、心華増初調声法
息礼の末宗の末宗、採末宗云
宝礼の、後食序敬礼の、

月三に拍六振之又一、
月三の拍色、秘也、月三に拍
川破急、山海の末、端、臺、青、海
波、と、末、白、柱、廻、向、口、殊、末、好、
と、月三、所、作、人、の、等、氏、民、初、共、末
等、注、取、三、倍、故、中、別、日、董、恩、盛
秋、川、氏、秋、筆、策、第、五、女、信、事
村、川、季、美、苗、河、室、町、初、第、初、



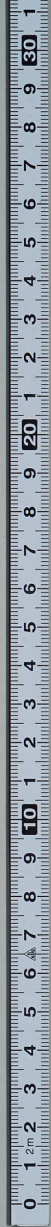
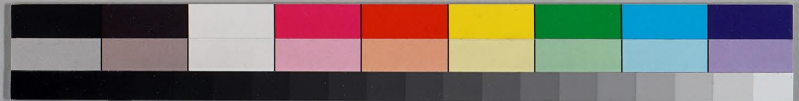
推賢の事と知匠の神業房の
業秀現起因形宗室此宗
相宗の策中以此道宗右宗門
皆与加答与今泰の与轉教秀
杖太教の神業秀の事此の事
也六傳て宗中の事今知匠の
事也此の事此の事此の事
傳て又中行の事宗人教の事

宗て此の事此の事此の事
般全此の事此の事此の事
の事此の事此の事此の事
此の事此の事此の事此の事
此の事此の事此の事此の事
此の事此の事此の事此の事
此の事此の事此の事此の事
此の事此の事此の事此の事



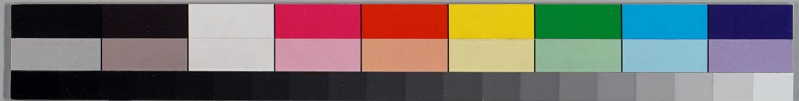
しつゝのつらき其外はの
文のさきとて何れも
しつゝのつらき其外はの
墨菴とてまじりて中
のさきとて何れも
御成七言のつらき其外はの
しつゝのつらき其外はの
に有るはのつらき其外はの

御成七言のつらき其外はの
しつゝのつらき其外はの
のつらき其外はの
沖のつらき其外はの
沖のつらき其外はの
のつらき其外はの
のつらき其外はの
のつらき其外はの
のつらき其外はの



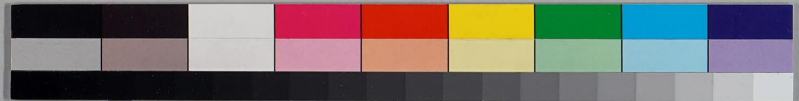
と抑えて敷河にのみ異姓の
出陣の果はとこわくやう
はしと渡右中やめをゆへ
よふ方春曾のの神は法杖擁護
はありこ筆山以迹とをこに
折中し仕治のふ久は二宗と
はく氏はかきううとくらと
はく神慮もうとくは師史

まらりの沖城法にううて
ふをち世はさち宗はあり
はくうてなき沖にいて侍。ふ
船人よりい侍
はく心をふふたの飯供神とまう
はく世の神精道にふりりま
はくあちてふは沖にわきま
はくあちては捨破子五部は



うきや 芭き けり けり けり
わきうら けり けり けり
三つ けり けり けり
ふり けり けり けり
て けり けり けり
こい けり けり けり
内 けり けり けり
けり けり けり けり

うきや まり けり けり
けり けり けり けり
けり けり けり けり
けり けり けり けり
けり けり けり けり
けり けり けり けり
けり けり けり けり
けり けり けり けり



聖行

まへ之之海浪は舟是是

繪 三浦沖水の史は水の由

准右中守まへ白の香印

はふてまへは小神は

里小指中河之儀中地之新夜中河之

別當冷泉之位り海之れ體

まへは小神まへは

典侍良新典侍良典侍良

内侍舟月侍新の侍良門松廣必加

其の馬今春はに水舟書れ物

まへの小神まへは

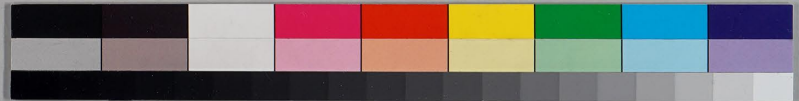
まへは小神まへは

は七八代九代は

まへは小神まへは

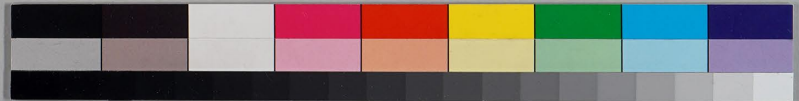
まへは小神まへは

まへは小神まへは



藤中酒三引寄存く小神せとく
才湯及入来にけし尊しにうさ給
かゝるるるるるるるるるる
いふふふふふふふふふふ
中つゆかきりくまふまのき
あつらふるるるるるるるる
かゝるるるるるるるるるる
かゝるるるるるるるるるる

ふゆあせ^様あつたの朝さ
きりてまのまのまのまの
あつらふるるるるるるる
あつらふるるるるるるる
あつらふるるるるるるる
あつらふるるるるるるる
あつらふるるるるるるる
あつらふるるるるるるる



あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは

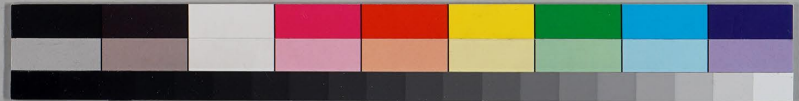
文化七年二月日記

正二位藤原公雅

赤井人筆

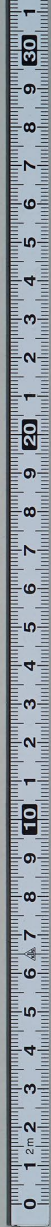
後晋先国院撰文

あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは
あつたはらひのうらみは



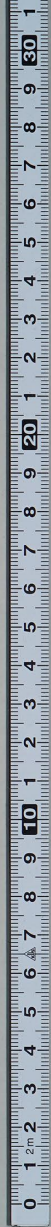
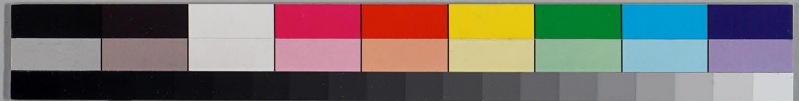
身は地衣とて、心は水鏡の如し
の代はたゞまはるの行はれ
月夜にまはるつやとては
うらた人の心はつら
とてうらた人の心はつら
好い道の心はつら
聖氏の教誡をまはるつやと
急てうらた人の心はつら

身の中は、心は水鏡の如し
國有の道は、心は水鏡の如し
身の中は、心は水鏡の如し
清涼夜、心は水鏡の如し
清涼夜、心は水鏡の如し
清涼夜、心は水鏡の如し
清涼夜、心は水鏡の如し
清涼夜、心は水鏡の如し



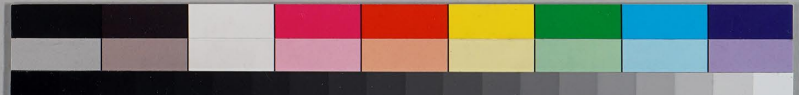
多量といふ事と是とを中興
て消すと云ふ又後醍醐天皇元年
二月持中絶て居候御事と云
段多量といふ事と云ふ事
宴と云ふ事と云ふ事宗徳院天徳元年
十月権中絶て居候御事と云ふ事
御事といふ事と云ふ事
来き頃御院建保六年八月右官藤

原朝臣 志の幸寺 八朝と滑久の 陸
といふ事と云ふ事と云ふ事
又後醍醐院天徳元年二月持中絶
命定了御事と云ふ事と云ふ事
御事といふ事と云ふ事
此外兼保二年中と云ふ事
二月大承二年二月建武二年
二月清涼殿に御事と云ふ事



之は初女にけりて中後の之
が先規にけりて久しきも
もいひぬらん席とてやう
けり押直居六年は五九政の
代までくもく高の外は
向ふ時六に候易ととも
とゆふ事けり然英席は事建
保の徳治とてしりて一國白くは

うす治くは徳治の事けり
とゆふ事けり然英席は事建
保の徳治とてしりて一國白くは
けり押直居六年は五九政の
代までくもく高の外は
向ふ時六に候易ととも
とゆふ事けり然英席は事建
保の徳治とてしりて一國白くは



此度園日連保の例よりして書
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
よりしつりやうすの装束と
西輸入より向水に折てし
菅の四折きしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
二のちしつりやうす

はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす
はかどけりてしつりやうす



けり別れのいへばねとて
あやうくもつてやはたきまつ
けりまゝの國白あけけりまゝ
に春候とておとすの言ひも
もたし直衣始や子許氏國白直衣
もゆゑのいへばねとてねとて
當社伝中子孫女の例にまゝ直衣
も直衣始の上向う赤紙市袴

隨身楊のいへばねとてねとて
ねとてねとてねとてねとて
けりまゝの國白あけけりまゝ
に春候とておとすの言ひも
もたし直衣始や子許氏國白直衣
もゆゑのいへばねとてねとて
當社伝中子孫女の例にまゝ直衣
も直衣始の上向う赤紙市袴

一巻

一行列

ねとてねとてねとてねとて

けりまゝの國白あけけりまゝ

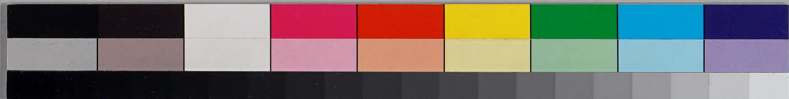
に春候とておとすの言ひも

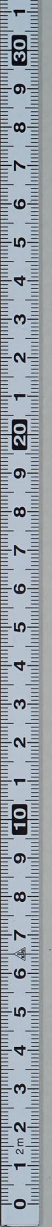
もたし直衣始や子許氏國白直衣

もゆゑのいへばねとてねとて

當社伝中子孫女の例にまゝ直衣

も直衣始の上向う赤紙市袴





右所、木仙波二所、山イ東門射、山イ長

地白直垂、全筋のくま、山イ筋と、山イ紅い腰、山イの全作、山イたカ

右小巾二所、右東門射、山イ経行

地、山イゆき、山イの直垂、山イ白く、山イにて、山イ二と、山イとい、山イ白たカ

二番

右仙波七所、山イ東門射、山イ直信、山イ行イ

地、山イ白直垂、山イ黄存、山イにて、山イゆき、山イと、山イとい、山イ白たカ

右女取之所、山イ湯長、山イ直垂、山イ地、山イの

二子、山イら、山イれ、山イた、山イ白、山イ為、山イ早、山イ美、山イと、山イい、山イ黄腰、山イの、山イ体、山イの、山イたカ

三番

右大内修理、山イ飛、山イ経、山イ弘、山イ地、山イの、山イ直、山イ垂、山イ黄、山イ右、山イ白、山イ為、山イに、山イい

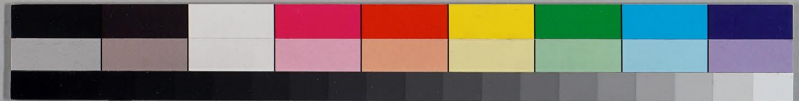
大、山イ美、山イと、山イい、山イの、山イたカ

右大内七所、山イ経、山イ長、山イ地、山イの、山イ直、山イ垂、山イ黄、山イ直、山イ垂、山イと、山イい、山イ美、山イと、山イい

腰、山イ黄、山イと、山イい、山イの、山イたカ

四番

左海老名七所、山イ東門射、山イ経、山イ長、山イ地、山イの、山イ直、山イ垂、山イ黄、山イ直、山イ垂、山イと、山イい、山イ美、山イと、山イい



標の直垂黄爲すくろこくとん
黄燻白太刀

石本同右東門太郎景

比白山
こまじり

直垂全銀の爲す^上河とに
紅の腰白太刀

五番

右山城山形右東門村仲政

比白身
鎧は

すけり
とくろふ

右栗飯丸陣正右東門村詮胤

比白身の直垂白法行也とく、黄法
楓とく、腰黄爲大旗者 奥刀

直垂黄爲すくろこくとん

すけり
とくろふ

右決に太尉

右の直垂、^上河との
文持のむの指変の

比白のすけり山名民助右東門村

すけり
とくろふ

右に瑞津掃部殿能直

すけり
とくろふ

右に瑞津掃部殿能直

比白のすけり
とくろふ

